

第三編  
開  
拓



## 第一章 先住民族

### 第一節 日本の人種

現在ではまだ最初のころの人類が日本列島に住みついた時点をも明らかにするところまでは至っていないが、上部洪積世には人間生活の跡が認められ、少なくとも沖積世に入って生棲した人類は豊富に遺物を残している。

全世界的に見ると、昭和五十四年一月米国の学者チームがエチオピアのアファル地区やタンザニアで化石人類の発掘を七年間にわたって続け、約三百万年前の猿人オーストラロピテクス・アファレンシスの発見を発表した。これまでは約二百五十万年前のオーストラロピテクス・アフリカヌスが人間の祖先であるとされていた。

アジアには世界的に最古の人類の化石骨が発見されており、日本においてもそうした古人類と関係のあったものか、その一部と思われるものの発見が明石で報告されている。

これらの洪積世の化石骨は、はたして現代人の直接の祖先であったかどうかは今後の解決にまたねばならないが、洪積世から沖積世にかけて引続き多くの人間が既に日本に居住していたことは明らかである。こうした人間はいかなる種属に属するものから由来したの

だろうか。

日本民族の構成の問題を考えるのには、古く石器時代にさかのぼって考えねばならないが、日本の古代先住民についての説に、(一)、日本石器時代人をアイヌ以前の古人種である。(二)、石器時代人をアイヌであると唱える説。(三)、アイヌの伝説を論拠として、日本石器時代人がコロポックルという矮小の人種でエスキモーに似た人間であるとの説がある。

これらは大森貝塚からの脛骨の発見や石器時代人骨の形質人類学的な研究、考古学、文化人類学上からの北千島調査によって、このアイヌが最近まで石器を使用したことを明らかにして、縄文式石器時代人は現代アイヌの祖先であり、弥生式土器文化人は固有日本人であるとの説による。また一方、人骨資料獲得のための大発掘も各地で行われ、それによる計測と日本人及びアイヌ人の骨格の計測値との統計学的に比較研究がなされた。それによると石器時代人骨はアイヌとも現代日本人とも大きな型の差があり、古墳時代人は現代朝鮮人と畿内日本人にもっともよく似通っている。こうした型差による結果、日本石器時代人は特異な独立した形質を有した人種であったが、それに大陸及び南方からいろいろの人種が渡来し混血によって現代日本人が構成されたと考える説。これに対して石器時代人骨が古墳時代人骨と比較して諸形質に差異が認められるのは、それぞれ時代の生活環境に基づくもので、本質的な差異とは認められない。むしろ石器時代人は現代日本の祖先であると考え、石器時代人の発祥地を華南方面に想定した説などがある。

以上のような日本民族成立をめぐる諸々の学者間でそれぞれ論議があるが、だいたい現在においては、石器時代人は弥生式時代人となり、古墳時代人を経て現代日本人となったという一直線の移行の過程が考えられるようになった。

ただし、この問題に関しては考古学・人類学ばかりでなく、民族学・言語学などの方面からも多くの研究がなされており、複合民族と考える説もあって、決定的な解決は将来に残された課題というべきものである。

## 第二節 本道の先住民族

本道の先住民族はアイヌ以前の北方民族かあるいはアイヌの祖先であったかは明らかでないが、蝦夷すなわちアイヌが和人の渡道された時から居住していたことを考えるとアイヌの先祖が主体であり、それ以前はよくわからない。

蝦夷は古代には日本本州に広く居住していたが、漸次減少してついに北海道・樺太南部に限られるようになった。

蝦夷には三派があつて北海道本島及び国後、択捉に住するものを本島蝦夷、樺太に住するものを樺太蝦夷といい、北千島から明治十七年に色丹島に移住した者を北千島蝦夷という。

この三派に体格・風俗・言語などに小差異がある。早くから風土の異なるところに居住して以来交通疎遠となり、また地方には接触する人種によりその感化も異なり、しだいに差が生じたものと思わ

れる。本島蝦夷の伝えるところによると昔この地にコロポックルと称する人種がいた。コロポックルとはコロコニポクウクルの略で落の葉の下の人という義だというが、これにはまたトイチセクル、あるいはトイチセコッコロカモイ（土の家を持つ神）などの称があり、樺太アイヌはこれをトンチといった。その後、学者の調査研究によりコロポックルも蝦夷のことであるといわれる。

本道の蝦夷はまた二種にわかれるという説がある。その一つが熟蝦夷で、本州に居住していた者が北上来道したものであり、他の一つは黄金色の鷲に乗って山韃サンダの国の浜から飛来したといわれる鹿蝦夷アサと区別される。

熟蝦夷が多い渡島・胆振などは比較的に本州からの古物が多く、奥地のは満州、蒙古地方の製作品が多いことによつてもそれが窺われる。アイヌは弓矢の羽に金色の鷲の羽を崇めて神としているが、北海道では獲れず、シベリヤのバイカル湖やオビ河地方の産物である。

蝦夷は昔から小部落を成して諸処に住居し、各部落に酋長がいてこれを統率して、互いに独立した生活を行っていた。時として諸部落が連合して事に当たるともあつたが、政治組織を有する国家的状態を形成した事実認められない。

### 1 石器時代

北海道の先史時代が始まったのは少なくとも洪積世の終わりごろ

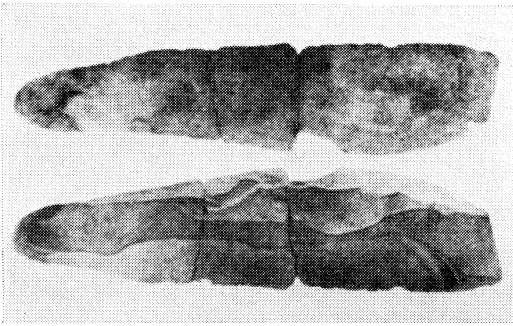
のヴルム氷河期ごろといわれる。それは今から三、四万年も昔のこととで、そのころの北海道はシベリア、樺太と地続きになって、シベリア大陸からマンモス象やオオツノシカなどを追って北海道に狩人が渡ってきた。

襟裳岬の南端幌泉で発見されたマンモスの臼歯の化石の近くからこの時代に使用したと思われる石器が発見されている。

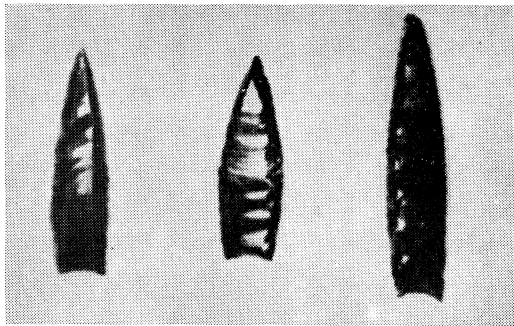
この石器はブレード(石刃)とよばれる利器である。ブレードとは小刀の身・木の葉という意味で、平行な長い縁をもっている薄い葉片の実用的なナイフである。石塊を同じ方向から打ち、薄くはぎとったもので、形をいろいろに作って使用するがナイフのように片方に刃がつけられているバックド・ブレード、ノミのようなグレイパー、矢の先につけるヤジリのタンゴド・ポイントなどである。

このように渡来してきた人々の遺跡が各地で発見されている。北見湧別川の上流白滝、常呂川の上流置戸、寿都郡の樽岸、尻別川上流の狩太などから大型ブレードなどが出ている。近くでは岩見沢、栗山付近などでも出土したといわれる。

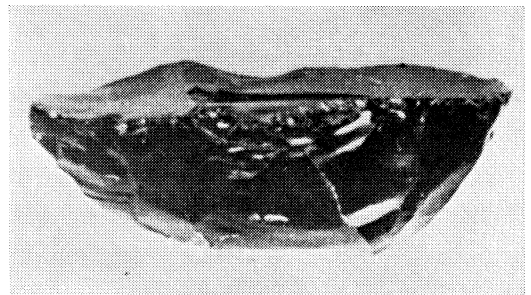
石器時代はヴルム氷河期からを旧石器時代又は石刃文化期とし、氣候が温暖になる沖積世の初頭ごろからは中石器時代又は石刃鏃文化期とよ



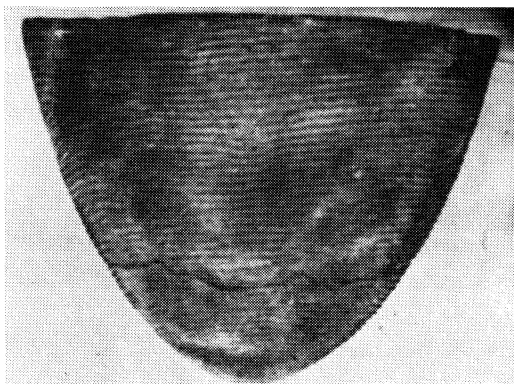
ブレード



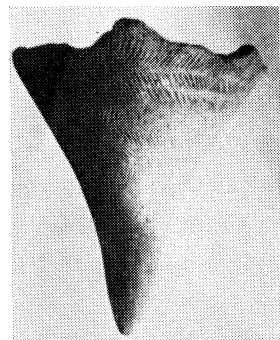
石刃鏃



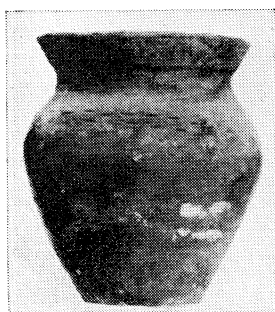
舟形石器



網文土器



尖底土器



オホーツク式土器

トルぐらいで鋭利に作られるものとなつたが、北海道の東北部に発見され本州では見られないところから石刃鎌文化は北方から渡ってきたものといわれる。



擦文土器

げられる。寒地性の動物が北へ移動し小型の動物を求めなければならなくなつた人たちは石器も小型化し骨や棒などと組み合わせて一つの道具として使用するようになった。石器もミックロリス（細石器）と名づけられ、三センチメートル



円筒土器



後北式土器

## 2 土器の出現

気候の変化に対応して新しい生活の方法を開拓しつつあった人類は、やがて弓矢の発明に続いて石を磨いて石器を作る技術と、土を焼いて容器を作る方法とを発見するに至った。これによって人類の文化が飛躍しはじめたのは当然であろう。土器の初めは主に煮炊きのナベ・カマに使用された。

大きな動物が去り獲物が少なくなると生活をおびやかされるようになってから食糧の貯蔵をしておくことが必要になり、カゴに粘土をぬって水のもらない器を作った。また火を燃したあとの粘土が固くなっていることなどから土器が考えだされたのは今から九、〇〇〇年前といわれる。

### 尖底土器文化（縄文前期）

土器の形態も作成法も民族によって、異なっているが古い土器には縄を巻いた跡のような紋様が表にあり、これを縄文土器という。

第一群は貝殻文系統の底の尖った住吉町式尖底土器で薄手で繊維が入っていない不安定な原始的なものである。第二群は厚手で粘土に繊維を含んだ尖底土器。第三群は厚手大型で底は円く半球状で粘土に繊維を含み、外側に太い綱を巻きあげたような地紋がある。

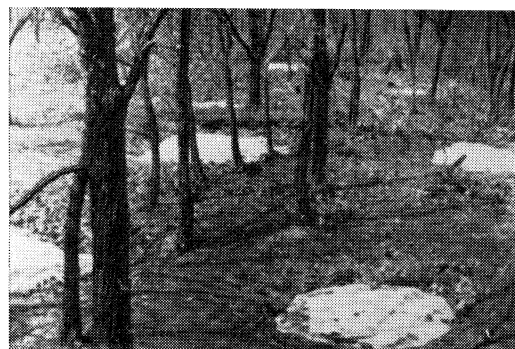
この時代の住居は堅穴式といわれ、貝塚も残されている。

### 筒形土器文化（縄文中期）

尖底土器文化は二、〇〇〇〜三、〇〇〇年過ぎ、土器の形が筒形



音江環状石籬



堅穴住居跡

平底となった。この形式は大陸では見られず特色のあるもので、表面に縄文をもっている。この土器はほとんど台地上にあって低地になく、当時の遺跡を結んだ等高線は新石器汀線と名づけられている。

#### 多形土器文化（縄文後期）

形に変化を与えた薄手の土器で、深鉢形・香炉形・かめ形・徳利形・盃形とさまざまである。地文は縄文であるが、それにいろいろな文様がつき、底は平底も揚底もある。出土される場所によって違いも見られ、北海道の東北部には前北式土器・西南部では野幌式あるいは亀が岡式土器に区分され、前者は形の変化に乏しいが、後者は形も変化に富み美術的であるといわれる。

#### 後北式土器文化（縄文晩期）——鉄器渡来初期

日本列島の北端にある北海道はまだ新しい稲作文化を受け入れることができなかったが鉄器が入ってきた。漢が中国を統一し鉄器文化を生み、沿海州から樺太を経て北海道に入ったのは二千年余り前である。津軽の海を渡り道南にも入ってきたが、いずれも海岸や大河川の地域に早く広まったといわれる。

鉄器が使われ出すと石斧が退化して半打半磨のものが多くなった。また土器は後北式に変わり縄文がなくなり擦文に移行しており、アイヌ文様に非常に似ているものに変わった。

#### オホーツク式土器文化——石器鉄器併用時代

奥羽地方の土師文化、祝部文化が北海道南部に影響して、後北式土器文化は擦文式土器文化に移行して、石器の使用も少なくなってきた。

また、そのころ大陸から追われた民族が南下し、オホーツク海沿岸に多く分布したが、土器には縄文がなく特にオホーツク式土器と名づけているが、代表的なものはモヨロ貝塚がある。この土器は口縁部付近に限られ縫目文様がある。

### 第三節 滝川における先住民族

米国の学者チームが北アフリカ地区で七年間もの調査を続け、約三八〇万年前の猿人オーストラロピテクス・アフアレンシスを発見したという。出土した頭がい骨・あごなどを放射線年代測定法など

縄文土器の時代区分

前年数	7000	6000	5000	4000	3000	2000	1000	500	100	50
本州	早期	前期	中期	後期	晩期					
北海道	前期	中期	後期	金石併用期	鉄期					
東北部	縄文式 朱円式 静内中野式	北筒式 余市式	前北式	後北式	擦文式					
	浦幌 東釧路	押型式 網文式 中野式	北筒下層 北筒上層	前北 船泊上層	三石木ロケ 御殿山	擦文式土器 土師器 高杯形土器				
西南部	住吉式	円筒式 { 栗沢式 野幌式 }	亀ヶ岡式	恵山式 (尾白内式)						
	住吉下層 住吉上層	円筒下層	野幌 亀ヶ岡式	続縄文文化・擦文文化	恵山 後北	擦文式土器 土師器 高杯形土器				

これによって綿密に調べた結果発表したものであるが、人類の祖先がこれによってまた古い年代に遡った。

この猿人は脳の大きさや顔の特徴はサルと同じだが、体つきは人類に近く二本足で歩き回っていた。身長は高いもので一・五メートル、女性よりも男性の方が大きく石器は使っていない。木や草の実

を運ぶためツルなどで作った袋のようなものを持っていたという。

人類が進化するにしたがいいろいろな道具を使うのが特徴であり、日本における先住民族の調査では人骨はほとんど発見されず、石器・土器などの発見により年代区分がされる。

日本では静岡県夏島貝塚の土器が、今から約九千年前のものと測定されており世界最古の土器とされている。

ここ滝川は二万年前は大陸と地続きでマンモス象などを追った人々が、この平野のどこかにいたことも考えられるが、さらに一万年前までに海となり、滝川は海底に眠っていた。この地域が隆起してきたのは八、九千年前以降のことで、現在地表から出土する先住民の遺物はそれ以後のものであるため、古いものが発見されたとしても縄文前期からのものとは考えられない。

### 1 滝川から出土する石器・土器

未開の原野を開拓するため屯田兵とその家族は懸命の努力で給与地を拓いた。開拓者は給与地を開き、次の追給地を得るため昼夜をいとわず開墾して、明治末期には平地には未開地がないくらいに開拓していた。先住民族の遺物である石器・土器類などに関心も薄く完全な形の土器は現在に残していない。開墾当時には遺跡や石器・土器も多かったといわれるが、田畑には尖った石器は危ない邪魔物であったのである。

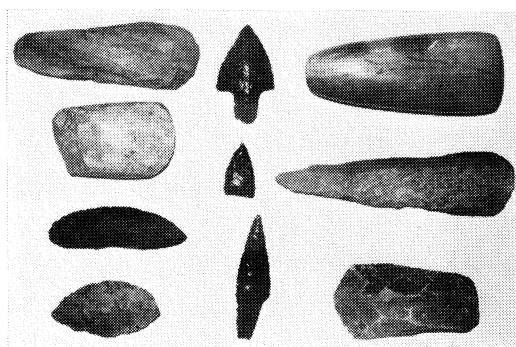
一の坂の洪積世低位段丘堆積層縁は海拔四〇〇〜五〇メートルであ

るがこの段丘に沿って泥岩、緑泥岩で造られた石斧（半打半磨製及び磨製）や黒耀石（十勝石）で造られた石鏃・石槍・石小刀、剝片などが多数出土した。

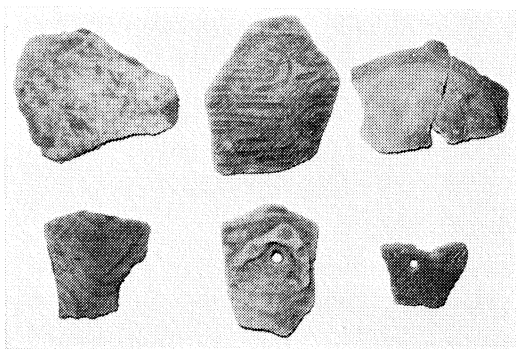
土器はいずれも北筒式（縄文中期）のもので、この段丘に沿って一〇カ所ほどから出土している。恐らく四、五千年前は河岸となっており、先住民はこの便利なところに集落を作り狩猟、漁撈生活を営んでいた竪穴住居跡地であったと思われる。

この段丘は石狩川沿岸に及ぶところから東一、二丁目、五丁目にも出土が見られ、江部乙にも連なるものと考えられる。

出土した土器で完全なものはないが、後出の石狩川沿岸穴居人種遺跡調査報告に上川道路の開削に当たった樺戸集治監の囚徒が掘り出したものを安村典獄が所蔵していると聞くとある。また東三丁目



滝川で出土の石器・土器〈市立郷土館蔵〉



の井上包太郎が乃木將軍に土器類を送った礼状もある。

現在郷土館に展示されているものは一の坂地域の山内一、南滝の川地域の白水務、東滝川地域の土井喜之助が保存していたものである。一の坂の段丘から先住民の遺物が出土することは、開拓当初からわかっていたことであるが、昭和三十五年六月元市立北海道滝川東栄高等学校教諭人見彰彦が現地調査を行って滝川市先住民遺物出土図をまとめた。

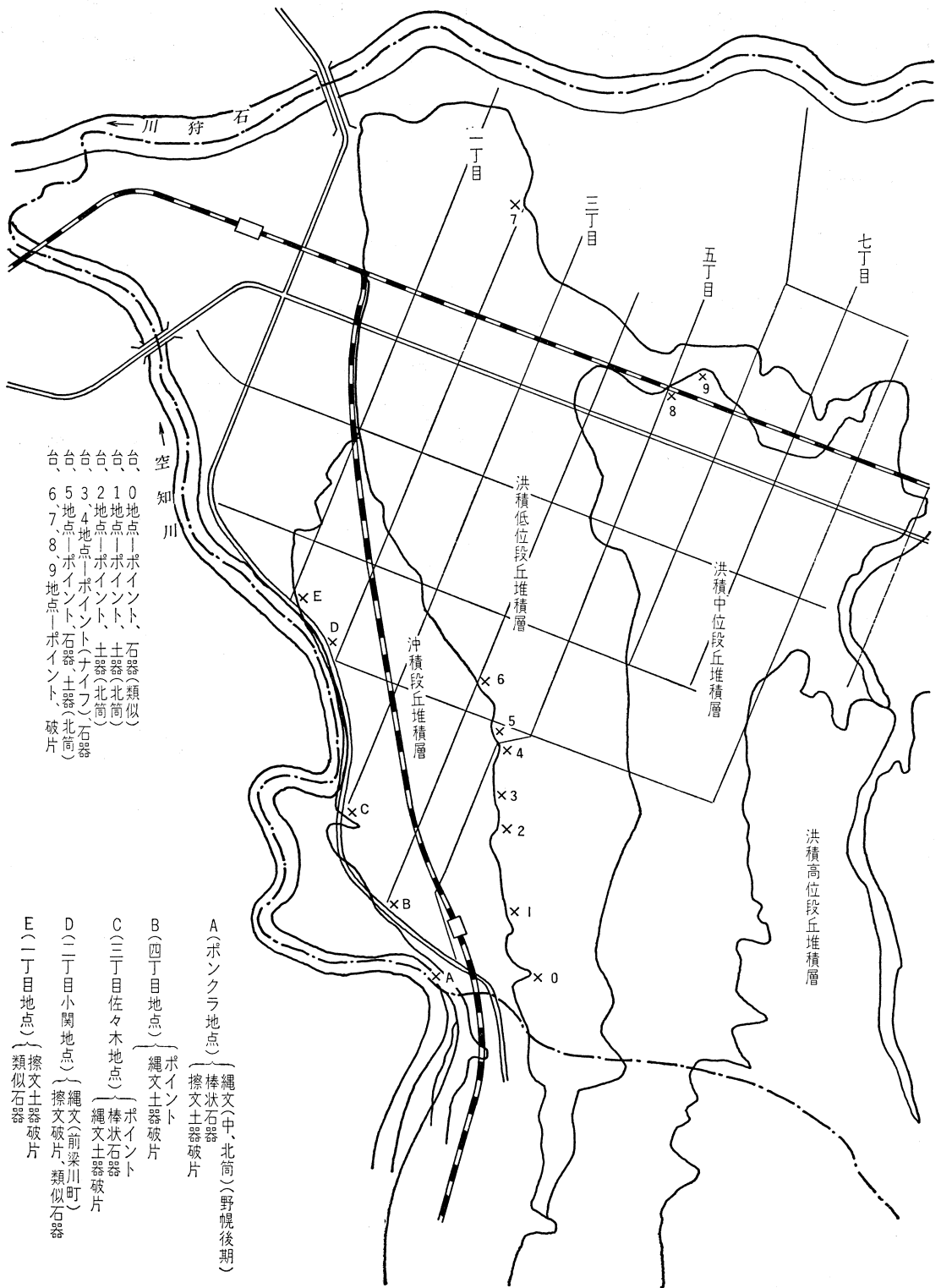
低住段丘よりさらに一段低い東一丁目から東滝川にかけては沖積段丘堆積層が発達した地域であるが、その空知川沿岸の各所からも石器・土器破片が多く出土する。

現在までの出土物から見て滝川の先住民は縄文中期の四、五千年前から擦文式土器の七〇〇年前にわたるもので、縄文中期土器は厚さが一センチメートルに及ぶもので焼きが少なく荒いものである。縄文後期になると焼きもよくなっている。

昭和五十一年春から空知地方史研究協議会では石狩川流域史研究会を発足させて石狩川中流域の先史遺跡を調査し、ポンクラ遺跡について次のように記している。

本遺跡は国鉄根室本線の東滝川駅の東側を流れるポンクラ川が空知川へ合流するところのすぐ西側に立地する。

本遺跡から採集した土器は口唇が内切し、口縁上の中央にボタン状の貼瘤をつけている。口縁上位には沈線が二本横走しその上に刻み加えられている。その下には沈線で奔放な曲線を描き、その内側をきれいにすり消し、もう一方の区画内を、燃りのちがう縄文原体を回転させて羽状をなす縄文を作出している。やや赤味をおびた焼きの良い茶褐色の土器である。縄文時代後期中葉の手



滝川市先住民遺物出土図(昭和35年6月人見彰彦調査による)

稲式土器に後続する常呂町トコロチャン南尾根遺跡出土の第Ⅳ類土器と同じ仲間である。

本遺跡からは、他に縄文時代晩期と考えられる口唇に刻線が加えられ、刺突文の多い土器や縦走する縄文の土器などが、ト部信臣氏らによって採集されている。

擦文土器は本州古墳時代の須恵器、土師器の影響を受けたせい、優れた技術で薄くて固い焼きを見せている。この擦文文化が次のアイヌ文化へと発展していったものと考えられる。

## 2 石狩川沿岸穴居人種遺跡調査報告

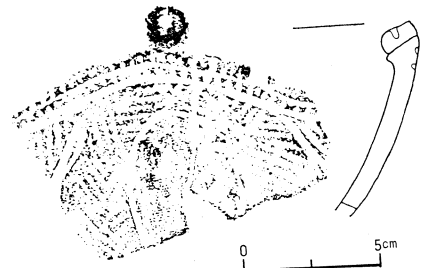
この地帯の遺跡を最初に調査したのは、上川探検で名高い滝川の先人といわれる高畑利宜の長男宜一で、明治二十六年夏に調査し翌二十七年十月の東京人類学会発行の雑誌第十巻第一〇三号に石狩川沿岸穴居人種遺跡の实地跡査した結果を報告している。

### ○石狩川沿岸穴居人種遺跡

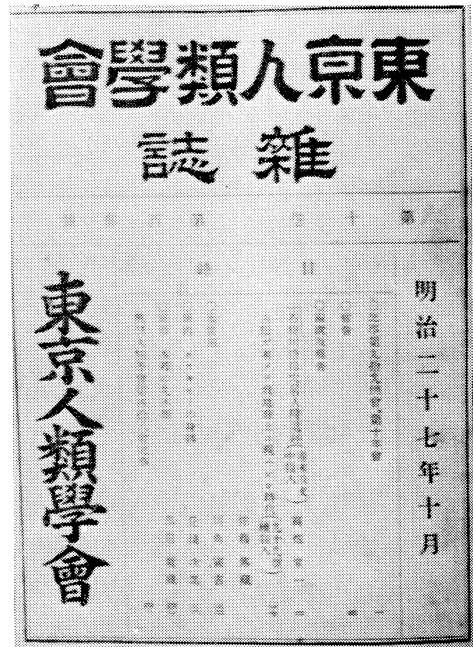
室蘭 高畑 宜一

(前略) 昨年夏期中石狩国雨竜、空知、上川三郡(注 樺戸を含め四郡)内ヲ流ル、石狩川本支流ニ沿ヒ堅穴遺跡搜索中不幸ニシテ例年ノ如ク七月下旬ヨリアイヌハ鱒魚ノタメ遠ク住テ家ニ在ラズタメニ地名ヲ尋子口碑ヲ聞ク事能ハズ殊に密草ノタメ堅穴所在地ヲ探グル事充分ナラズ又降雨ニ遮ラレテ往々手冊ニ記事ヲ書スル能ハス或ハ途次磁石ノ紛失セル事等ニヨリ不完全ナル調査ニ過ギザルモ読者諸君其要領ヲ得玉ハゞ幸甚不過之

## 第一章 先住民族



滝川市ボンクラ遺跡出土の土器



東京人類学会雑誌

### (一) 口 碑

堅穴遺跡ハ如何ナル人種ノ手ニナリシヤヤ堅穴所在地ノ人ニ就キテ問ヒ尋ヌル二十中ノ八九ハアイヌノ遺跡ナリト答フル人多シ或ハ彼等ノ鮭魚ヲ漁シ穴中ニ入置キノ跡ナリト云ヒ又稀ニ矮人ノ遺跡ナリト云フ人アリ、然レドモ皆ナ覈究セシニアラズ多クハ伝聞或ハ想像ニ止マル事ト知レバ姑ク土人ノ口碑ヲ記ス事トス

雨竜郡新十津川村「ウラシベ」ニアイヌ住家三戸アリ茲ニ雨竜郡内ニ散住スル五十余人ヲ総督スル酋長イチリ住居ス全人眼光鋭ルドク鼻高ク髻尺余ニ達シ骨格偉大ナリ年令三十一歳(自ラ云フ)ナリト全人ニ就キ穴居跡ノ有無ヲ問フニ新十津川村及我居宅近傍ニ穴アリ穴ヲ稱シテセヨ(意穴ナリト云フ)ト云フ往昔小人穴中ニ居住シ昼ハ「イケマ」(白前科)ノ実(己レノ食指ヲ示ス)ヲ二分シ其一ヲ舟トシ日中ハ舟中ニ魚血魚鱗ヲ盛り舟ヲ綱ニ結ンテ水中ニ泛ベ以テ舟ヲ使用スルノ形跡ヲ知ラシメス夜ハイケマニ輕舸シ漁業ニ従事ス或ハ其家ニ入り其人ヲ見ントスレバ即時ニ見ヘス斯ク常人ト異ナルヲ以テカムイ(神)ナリト為ス時ニアイヌノ食ヲ乞フアレバ夜中入口ニ置イテ去ル曾テ血氣ニ猛ケル壯年其容貌ヲ見バヤト窓ヨリ其神人ヲ曳入レシニ一婦人ナリシ然ルニ彼等此處待ヲ受ケシヨリ怒リ去リテ遂ニ行ク処ヲ知ラズト祖先ヨリ言伝ヘアリ云々(中略)

雨竜郡新十津川村(注 樺戸郡の誤り)ヨリ空知郡滝川村市街地ニ至ル石狩川渡船場ニ其業ヲ営ム茂兵衛トナン呼ベル者アリアイヌ婦人ヲ娶リ地理ヲ詳ニス全人云フ今フシコ雨竜ニ住スルアイヌ某ノ亡父ノ曾テ語ル所ニ抛レハ三代前穴居人此地ニ住シ東ニ窓ヲ作り西ニ入口ヲ設ケ身体短小身ニ黧シ皮膚殊ニ白カリシト云フ

(一) 堅穴及発掘品

雨竜郡新十津川村「ウラシベ」ニ住スルアイヌ小屋ノ側ニ堅穴一個アリ円形ニシテ直径二十尺深サ二尺発掘物ハ第三図磨礪セザル砂石其他不規則ナル形状ヲ有スル石一二個地下七八寸ニシテ出ズ地勢ハ原野ニシテ石狩川ヲ離ルル凡三十間其上流六七間ヲ隔テ又一小河アリ

雨竜郡新十津川村二百五十四番地松谷盛勝全二百十二番地植東三代松全二百六十番地西井初吉三氏畑地内ニ堅穴十八個(現ニ目撃セシ数ナレド草深ケレバ尚ホ他ニ存スルモノアルヤモ不知)アリ(中略)(注 図の発掘場所状況説明)

空知郡滝川村番外地石狩川沿岸ニ穴跡二三個アリトイチリヨリ聞キ再三搜索セシカド草深ク遂ニ見当ラス全番外地ニ一条ノ小流アリ此近傍曾テ道路開鑿工事中樺戸集治監役囚土器ノ完全ナルモノ掘出セシ由ナレドモ現品ハ時ノ典獄安村治孝氏所蔵セリト聞ケリ又堅穴モ四五個アリタレドモ今其位置ダニ知ルヨシナン(中略)

(二) 石 器

空知郡滝川兵村東一丁目二十五番地松崎品次郎全十四番地阿曾沼延一両氏畑地近傍ニ石鏃アリトイチリヨリ聞キニ違ハズ地上ニ石多ク散在ス松崎氏畑地ニテ黒曜石碎片ヲ得阿曾沼氏畑地ニ於テ第十五圖ノ石ヲ得タリ全氏ハ嘗テ黒曜石鏃二三個ヲ得タリト云フ(中略)

(四) 環状石籬

空知郡「ヲキリカッブ川」以西道路ヲ距ル数丁ニシテ山アリ山顛環状石籬十一个アリ石籬ノ内部大石ノ埋蔵セラレテ発掘容易ナラス石籬ヲ倒サントセシモ深ク埋モレテ動カス石籬ノ高キハ三尺低キハ一尺以内ニシテ直径一丈三尺五寸ナリ又他ノ石籬中ニ周圍三十八吋及四十一吋ノ柏樹石籬ヲ咬ミ生長スルアリ山上眺望絶佳山麓ヨリ石狩川マテ相距ル近キハ六七丁ニ過ギザルベシ故ニ地勢上ヨリ觀察スレバ頗ル要地ヲ占メ此地方ノ咽喉トモ稱スベキ所ナレド或ハ祭祀ノタメニ使用セシモ不知山麓ニ於テ土器破片ヲ採集ス

(四) 土 塚(塚)

右石籬ノ最寄ニ土塚アリ高三尺二寸長一丈五寸巾四尺余而シテ土塚ノ一方縁低下ス試ミニ地平線マデ崩壊セシニ何モ出ス土塚ノ土ハ赤色下層土ノミニシテ黒色ノ表土ナシ(中略)

右調査ノ材料ニ基キ総括スルトキハ大要左ノ如シ

堅穴存在ノ地勢ハ石狩川沿岸或ハ支流ニシテ現今流水スル歟若クハ乾涸セシ古川ノ岸上高層ナル原野ニ多トス又稀レニ樹林地ニ於テ之レヲ認ムル事アリ而シテ其穴タル地ヲ掘ルニ尺乃至四尺内外ヲ通例トス其発掘セル土ハ穴ノ四囲ニ上ゲ置ケリ穴ノ直径十尺ヨリ三十六尺ノ間ニシテ円形、方形、長方形、楕円形ノ四種トス然レドモ正方形ハ少ク一方長キモノ多シトス大小二個ノ穴(一家族?)數尺ヲ隔ツルカ或ハ數間ヲ離レ整然並列シ其総數一ヶ所ニ於テ七八十戸以上ノ一部落ヲナセシモノアリ而シテ春夏秋ノ三期ハ穴居セス冬期間ノミナリシガ如シ外ハ他日論スル事アルベシ

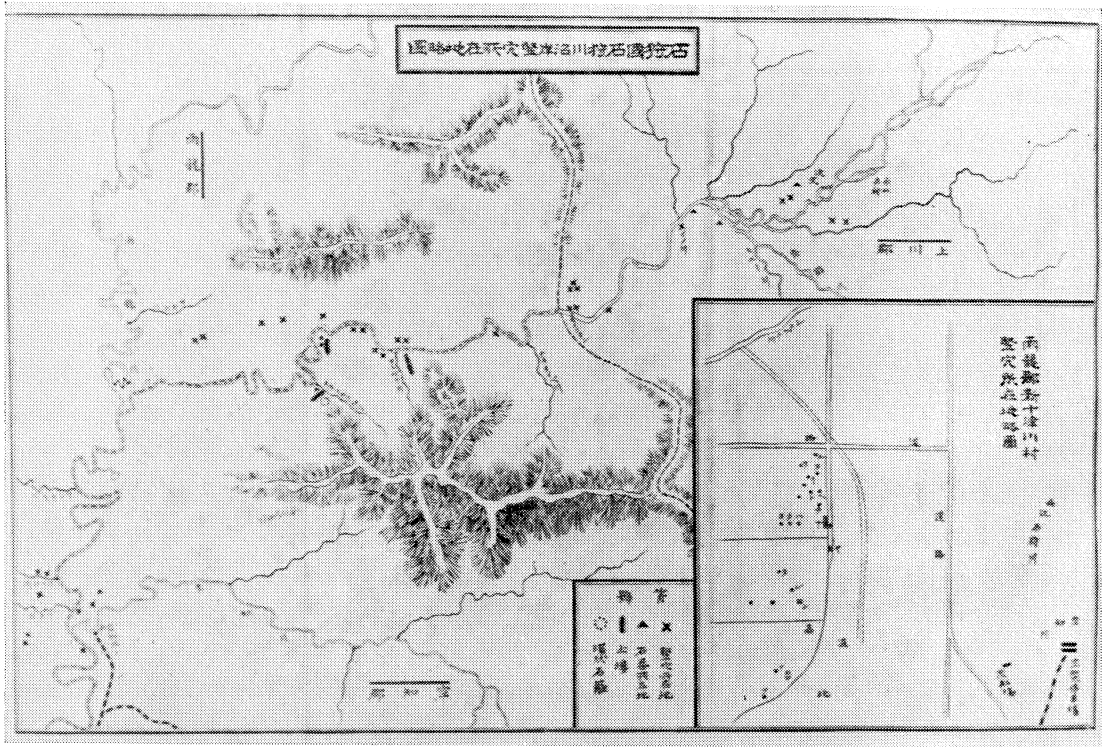
穴居人種ノ使用セシ発掘品ハ穴ノ内縁ニ多シ埋没品ノ深サハ穴内ノ位置ト穴ノ大小ニヨリ一定セサレトモ内縁ノ深サハ尺以上二尺迄トス中央ハ四五寸以上尺二三寸迄トス繩紋土器、朝鮮土器アリ土器ノ形状模様ノ差不勦ト雖モ第四十五圖及第四十七圖ノ網形最モ多シトス穴内ヨリハ未ダ石鏃石鉋丁及雷斧石ヲ出サス只磨礪セザル第一圖ヨリ第九圖ニ至ル石(綱ニ結ビシカ或ハ筵ヲ編ムニ用ヒシモノ)カ穴内及平地ヨリ數十個出ツル事アリ)最モ多シ鍋斧刀劍滿洲玉胸飾一厘錢ハアイヌノ使用セシモノニ疑ナシ然レドモ穴内ヨリ出デス只斧一個穴内ヨリ掘出ダセシモノアレド予ノ発掘セシモノニ非ラザレバ卑見ヲ下シ一定ノ判断ヲ為ス能ハズ

曲玉及裝飾用鉄器ノ出シ処ハ堅穴ヲ去ル二三間ニ過ギズ又土器破片接近地ヨリ出ツルニヨリ穴居人種ノ使用セシモノナリト推考スレド二三間ヲ離レアイヌノ使用セシト覺シキ刀劍ノ出ヅルヨリ考フレバアイヌノ使用セシ者ナルヤモ知レズ然レドモ茲ニ注意スベキ要點ハ土器ノ出ツル深サト曲玉及鉄器ノ存在セシ深サト大差ナキニ依リ同一時代に同一人種ノ使用セシモノナルヤモ知ルベカラズ

穴居人種ハ紡績車ヲ用ヒ韮(ふいご)ヲ使用シテ鉄器ヲ製作セリ既ニ穴中ニ一小鉄塊ノアルアリ又少金井良精君千島ノ一島中ノ堅穴ヨリ鉛ヲ発掘セラレシ







石狩川沿岸に於ける安政三年五月松浦武四郎の探検地略図

事アリ石器土器ヲ使用セシハ発ヒナシト雖モ又鉄器ヲ用ヒシヤ明白ニシテ北海道ノ堅穴遺跡ハ草味野蠻ノ石世時代ヲ脱シテ鉄器時代ニ進歩発達セシ人種ノ手ニナリシト信ス

この報告文にある堅穴の位置は現在の中島町、有明町に当たり、土器については当時空知川に流れるシュブオマナイ（鮫の産卵場）とよばれていた川で現在の大町から明神町、空知町を流れていた小川と国道十二号の交差する地点（現在の中山組近辺）から発掘したものである。このように石狩川、空知川の両沿岸各地には先住民の遺跡があつたのである。

#### 第四節 滝川とアイヌ

##### 1 トックアイヌ

蝦夷地の内陸部探検のため安政三年五月松浦武四郎はトック土人セッカウシ、トミハセ、その他の土人の案内で石狩川を遡って各地の様子を詳細に記録している。その後においてもしばしばセッカウシ、イチレーなどの名が見られるがこの探検への協力功労は大きい。当時の様子を記録した部分を二、三あげると次のとおりであるがこのトック土人は石狩川と空知川の合流地点に住んでいた。松浦武四郎が向源太夫へあてた報告文にトックアイヌの居住場所が明示されている。

「アハタシナイ」右の方小沢、左の方平地、此処に土人小屋三軒有之候。畑地至極宜敷、猪召連の乙名「セッカウシ」「トミハセ」「イタハウシ」三人の者の村落に御座候。相応の平地肥沃、樹木五、六丁四方の間無之候間眺望宜敷御

座候。

とあり、現在の銀川右岸川口近くに住んでいたものと思われる。

十一日(註 安政三年五月)ハツ過にトックに泊る。此処に人家五、六軒有。召連土人の村なれば老若のもの七人も出来り大悦びにて、直にセツカウシは毒箭を以て山に到り、女共はレレフを搗て煮て我に出し、子供は川に到りしが、五、六寸位の桃花魚(ユユイ)を暫時に三本斗捕来りしを柳の枝に刺てでんがくとなして我等をもてなす。夕方トミハセは大なる雄鹿一疋を負いて帰る。また女夷イルカマツとウエテマツと云が山より犬に捕獲させしとて鹿一疋を持ち来りぬ。実に今夜の樂は何とも云うべきなし。

十二日 今朝いつもより早く起きて撥上り屋頂にウリウブトと云に到る。

(以下略)

〈簡約松浦武四郎伝〉

この文に出てくるセツカウシはトックアイヌの酋長であり、イルカマツはその母、ウエテマツは妻である。翌安政四年、松浦武四郎は五回目の内陸探検に立ち寄っている。

十五日(註 安政四年五月) 微雨、出船す。トミハセ(人名)、セツカウシ(人名) 兩人は己が家へ今日は着する事を悦び一色に出精しける也。キウシナイ、チャンナイ等過けるが、所々湍瀬の有けるにはか取難く、八ッ過ソラチプト(従ウラシナイ六里)に行。此川第二の支流なり。源はトカチ岳より来り、過て(十七八丁) トックフト、是第六の支流也。過るや土人杖を叩く、黒唇一人蘆荻の中より眺め家へ帰りぬ。其間に内に文席をしきつめ余を響せり。依て上陸してトミハセ、イタハウシの家を廻り、セツカウシの家へ着し一同の者へ煙草、針、糸、火酒等遣して賑はしむ。妻は余に各葱一輪草と干鮭を入、熊の油にて煮て出す。家の傍に狸豆、眉豆、粟、糯粟、稗等作る。是皆黒唇の業なりとかや彼等未だ鋏を不持、また運上屋よりも彼方へ農業を教るを禁め有が故に決して渡さざるとかや。依て鋏に横に柄を附用ゆ。

日数経て突区の里に来て見れば

こゝもかわらぬ蘆ぶきの宿

トックアイヌの生活状況がよくわかるが、さらに明治時代に入つて肥塚貴正の上川見聞録に次のようにある。

明治三庚午年(一八七〇) 春石狩国上川郡空知郡樺戸郡等の諸郡境界実地見分の命を請け途中の情件など枚挙いとまあらざれども其一、二を掲ぐる事左の如し

折明治三庚午年の春上川行の命を受けて、札幌土人乙名(酋長)「イコレギナ」をはじめ、琴似村土人又市外土人(内一名は通弁ヲ兼召連但佐留ヲノ土人ナリ)二十余人を(前導並糧未運輸ノ為ナリ)率ひ二月上旬雪を冒し札幌を発程八日間を経て空知郡の字中川(空知郡土人の居住スル地ナリ)という所に到着す。乙名(中川の酋長)「セツカウシ」の家に寓す。戸内を見ればみな新しきキナ(蒲草ノ様ナル草ノ織物ニシテ敷物或ハ旅行野宿等ノ節ハ仮ニ屋根ナドニ用ウル物ナリ)を敷つらね甚美なり。

我輩は直に戸内に入炉辺へ近寄り草鞋其外支度を解く此日空天隠々として午後より雨雪大に降身に随ふ衣類はことごとく濡たり。故に担はせ来る所の荷物(着換ノ衣類ヲ入置タル)を土人(召連レタルモノ)に求むれども唯応答のみにして曾て老人も戸内に入者なし。稍しばらくして乙名(札幌土人)「イコレギナ」をはじめ役土人(乙名並小使)等順次いづれも腰を屈め両手を膝下にあて寸歩して戸内に入り(其形笑フベキモノアリ)戸主に向て炉辺に坐す(坐禪)無言にして且仰ぎ見ず、戸主もまた同じく無言敢て仰ぎ見るなり。メノコ(戸主ノ妻ナリ)背を客人に向て戸主の右側に当り片隅に屈み居無言にして髪を前面に垂れ其形面部を見せざるが如し。やや暫ありて(凡十分余なり)順次戸主へ向て礼(是ヲ俗ニ蝦夷語ニテランガミト云ウナリ)をなす。畢つて戸主も答礼(礼中の口述ハ始テ面会或ハ久々且旅行慰勞臨機互ニ述ル所ノ情体ハ敢テ常人ニ異ナルコトナシ)す。且旅中双方に於て両手を摺り(神仏ヲ拝スル形チアリ)或ハ髻を撫する等の式(所謂礼法ハコレニアリト云フ)戸主への礼畢て後またメノコ(戸主ノ妻ナリ)へ向て礼をなす(戸主へノ礼ト同クアレドモ其間短シ)メノコは黙然見向もせずして唯屈居すあるのみ。礼ことごとく畢て後一同坐を崩し四方の諸笑平日に異なる事なし。我輩は礼式畢るの間総身濡たるまま無言にし寒さを忍びたるは実に困難に堪ざる程なりき。また土人共礼式の中に大に笑うべきものあり(筆紙ニハ述ガタシ)しかれども其礼式の正しきこと又常人の及ばざるものあり。而して我輩メノコ(戸主の妻ナリ)の黙礼を見るに甚だ怪しみ土人に(通弁ヲ兼テ召連タルモノ)諮ふに其情をもつてす彼答日(土人)メノコ(土人の女一ノコトナリ)の礼は右手の指を以て鼻下

を撫するは則礼（指ヲ以テ鼻下ヲ撫スルコト一、二度或ハ三度ニ及ブト吾人ハ着目ヲ爰ニセザリキ）なりといふ。

また爰に（同家ノコトナリ）我輩の頭上にあたり、赤子涕泣するの声聞えけり。而して其居る所審ならず耳を聳て聞所いよいよ頭上にして坐席の辺にあらざ八方を見廻せども赤子の置くべき場所更に見えざれば余りにいぶかしく思ひ同僚に問へども是また我輩と同じく其处在を知らずとたとえ不審におもふ折から「セツカウス」（戸主ナリ）何事なるやメノコの語を見る。メノコ（戸主ノ妻ナリ）速に炬の上に釣り置く処の棚（奥羽北海道ニ於テ俗ニ通称スル火棚ナリ）何レモ台所ノ炬ノ上ニ釣りアルナリ農家或ハ漁家ニ於テハ樞要ノ棚ニシテ日々働クトコロノ濡タル衣ルイ股引其他一式ノ濡物ヲ焚火ノ上ニ掛ケテ干カスベキ棚ナリ）に釣り下げある小さき美なる俵の如き物を取卸し（前に云フトコロノキナト云シキモノ等ヲオル草ヲ以テ拵ラヘタル赤子ヲ入置ク器物ナリ）中より赤子の生れて七、八ヶ月ばかり経たりと思しきを出し、（衣類ナク裸体ナリ）乳を呑ませければ忽涕泣を止め而してメノコ（赤子ノ母ナリ）の懷を離れ遊び居る、折から我人愛を加へたるに更に屈する色なく（肥り色白クシテ誠ニ可愛ノ小児ナリ）さもうれしげに遊び聊寒氣かるべき躰も見えず其健康なること驚くに絶えたり。土人の常に壯健なる事は以て推し知るべし。尚同家には十一歳ばかりを頭として五六歳に到る三人のセカチ（土人語ナリ男小児ヲセカチ女ノ小児ヲカナチト亦フナリ）あり（男児成人シテアイノトナル、女子成人シテメノコトナルナリ）近傍土人の家に使ひ或は遊びに歩行する等何れも既足なり。

アイヌの風習や生活の一端がうかがわれて面白い。

明治五年六月十五日、開拓使一等属高畑利宜が岩村通俊の命を受けて、通舟のアイヌ人熊五郎と舟子のアイヌ三人を連れて丸木舟で創成川から乗組み、石狩川を遡り中島に着いたのが六月十六日であるが、その記録に

「石狩川と空知川の合流する二股の中島という処に土人小屋四五戸あり、此処にセツカウシと申すアイヌが居り（明治二十四年頃死亡せり）、又イチレアイヌも居たりしが、此土人は雨竜、権戸、空知三郡の酋長で中々鬚の長い大兵

で絵に書いた鬼の様な人相で土人の総乙名（注 酋長のこと）の役目があった」とある。

トクアイヌはこの近辺の空知地方に居住するところからソラチアイヌに属しており、石狩川の中流地区にあるところから「中川の」に当たる「パンウングル」ともよばれていた。（大日本地名辞典、明治四十二年十二月吉田東五著）

セツカウシ一族の先祖は石狩に住んでいたようで、何代か前のイクサクの時（注 前市史ではシリバシゲから三代目とあるが、セツカウシまでの世代が不詳）に石狩川を遡り中島に住みついたらと伝承されている。

又セツカウシの弟バセサンマは雨竜伏古に住み、その子砂沢マカナクルやイシムイタキなどが住んでいた。アイヌの聚落は「コタン」とよばれているが、気象環境がよく舟などの発着に便利で食糧も得易いなど、生活環境のよいところに居を構えたものであるが、中島は交通の便や夏・秋にかけてのマス・サケの漁撈、熊や鹿の狩猟に大変よい所であった。

これらの区域をアイヌは既に定めていたことが明治九年六月に石狩から十勝を調査した松本十郎の紀行にある。

土人某曰、曾テ土人共ノ定メタル分轄ハ

石狩川口ヨリ標津マテ 石狩持

標津ヨリ空知太マテ 権戸持

空知太ヨリ雨竜太マテ 空知持

雨竜太ヨリカムイコタンマテ 雨竜持

カムイコタン上流十勝境マテ 上川持

とあり、また石狩川沿い上流までの乙名・小使各コタン分轄支配

もあつた。

- 一 カバトよりウラシナイまで 乙名トミハセ但明治八年十一月病死  
跡継人撰中
- 一 空知よりトックまで 乙名セツカウシ 小使ハレサマ
- 一 雨竜よりイチャンまで 乙名イソラン 小使イナヲカントリ
- 一 上川総乙名 乙名イソラン 小使レタシハ但明治八年十一月死
- 一 チカフミよりウシシベツまで 乙名シレアエノ 小使カンナノミ
- 一 アサカラよりビビまで 乙名ニホンウンテ小使モノクテ
- 一 チュウベツよりベベツまで 乙名シリコフツネ
- 一 ナイボウ 乙名イナオカン

アイヌの乙名おとなや小使は役土人のことで乙名は部落長、脇乙名はその補佐役、小使は乙名の命によって部落の者に号令するもので、これを三役と称した。ただし小部落には脇乙名を置いていなかった。

松前藩の成立以前はアイヌの勢力も相当なもので、各々独立したなかに酋長がおり生活していた。和人の来住により生活をおびやかされるようになって戦いがたびたび起こり、特に寛文の乱に敗北した以後は孫の一門が逆心なく殿様に従うとの起請文を出し、今まで対等の地位にあった大酋長も服属するようになったもので、その後各部落の酋長を乙名おとなというようになったものである。

なお、乙名・小使など各部落を支配する役名のほかに、寛政ごろから場所ごとに総乙名・総小使などの役名を設け、その地方一の家柄の者に与え、蝦夷アイヌに対する命令はこの総乙名に与えて蝦夷人に了解させ、アイヌは乙名の裁かれぬ事件などは総乙名に訴えて裁きを受け、これでも裁断できないものは藩官に訴えて裁断を仰ぐというようになった。

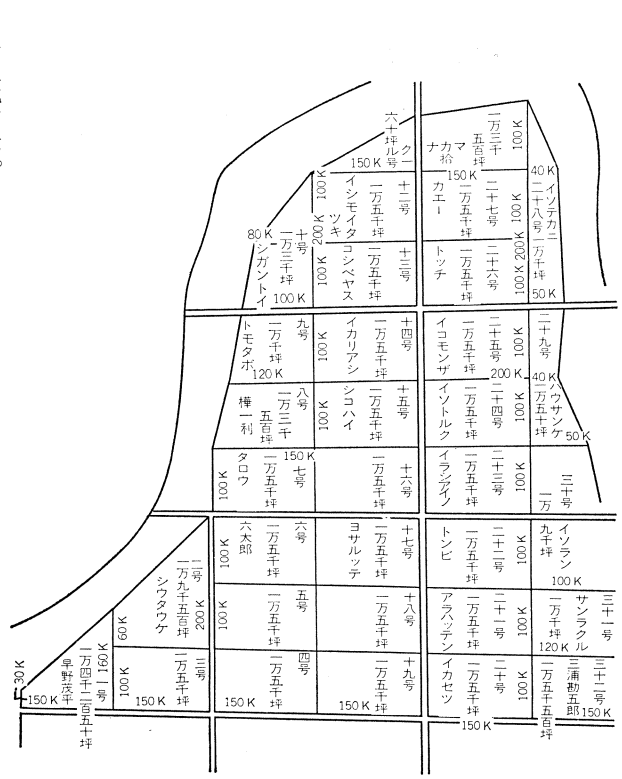
この三役のほかに土産取という役もあつた。「土産取は平土人中より力役或は品行宜しきものを撰抜し、請負人の小使役或は役人の案内又は土産送与するに其の品行を調等に使役す」とある。

明治十七年十月に樺戸集治監月形潔典獄が上川郡巡回のため石狩川を遡った時は、空知川畔土人四五戸の居があり、セツカウシの長男であるイチレーが住んでいと述べているところを見ると、その後の明治十九年上川道路の開さくのため、和人が大勢空知太に来るようになったから、石狩川を渡り現在の新十津川町橋本町に住むようになったようである。

## 2 ウシスベツアイヌ地の存置と喪失

奈良県十津川郷からの移民は新十津川トック原野に入地することになり、道庁では明治二十二年秋から翌二十三年春までに入植地区画割を行ったが、石狩川沿いに散居するアイヌに新十津川ウシスベツをアイヌ地と定めることとして、三二区画四六万九、二五〇坪の存置をはかり、浦臼・雨竜伏古などのアイヌも含めて二六戸が入地した。

アイヌ民族は狩猟や漁撈に習熟しており、農耕は従とする生活であり、土地所有の觀念に乏しかったため、せっかく給与された土地を担保として酒食に替えてしまった。しかし漁猟だけでは生計が立たないため、しだいに奥地へと入り込み、ワッカウエンベツ川の奥に新たな土地を受けてコタン部落を形成した明治四十三年八月一日



新十津川アイヌ地給与地図 (旭川刑務所蔵による)

付土地付与)。

明治時代のアイヌ住居の土地について、明治十年制定北海道地券条例第十六条に「旧土人住居の土地は、その種類を問わずなお総べて官有地第三種に編入すべし。ただし地方の景況と旧土人の情態により成規の処分をなす事あるべし。」と規定され、表面上官有地としてアイヌに所有権を付与しないが使用収益させることとした。

この規定は明治三十二年制定の北海道旧土人保護法の出るまで行われたが、新法ではアイヌに下付した土地の所有権には譲渡・質権などに制限が付けられた。

北海道旧土人保護法

第一章 先住民族

第一条 北海道旧土人ニシテ農業ニ従事スル者、又ハ従事セムト欲スル者ニハ一戸ニ付土地一万五千坪以内ヲ限り無償下付スルコトヲ得。

第二条 前条ニ依リ下付シタル土地ノ所有権ハ左ノ制限ニ従フベキモノトス。

一 相続ニ依ルノ外譲渡スルコトヲ得ス。

二 質権、抵当権、地上権又ハ永小作権ヲ設定スルコトヲ得ス。

三 北海道庁長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ地役権ヲ設定スルコトヲ得ス。

四 留置権先取権ノ目的トナルコトナシ。

前条ニ依リ下付シタル土地ハ下附ノ年ヨリ起算シテ三十ケ年ノ後ニ非サレハ地租及ビ地方税ヲ課セス。

又登録税ヲ徴収セス。旧土人ニ於テ従前ヨリ所有シタル土地ハ北海道庁長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ相続ニ因ルノ外之ヲ譲渡シ又ハ第一項第二項及第三項ニ掲ケタル物権ヲ設定スルコトヲ得ス。

第三条 第一条ニ依リ下付シタル土地ニシテ下付ノ年ヨリ起算シテ十五ケ年ヲ経ルモ、尚開墾セサル部分ハ之ヲ没収ス。

第四条 北海道旧土人ニシテ貧困ナル者ニハ農具及ビ種子ヲ給スルコトヲ得。

第五条 北海道旧土人ニシテ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ、自費治療スルコト能ハサル者ハ、之ヲ救済シ、又ハ之ニ薬価ヲ給スルコトヲ得。

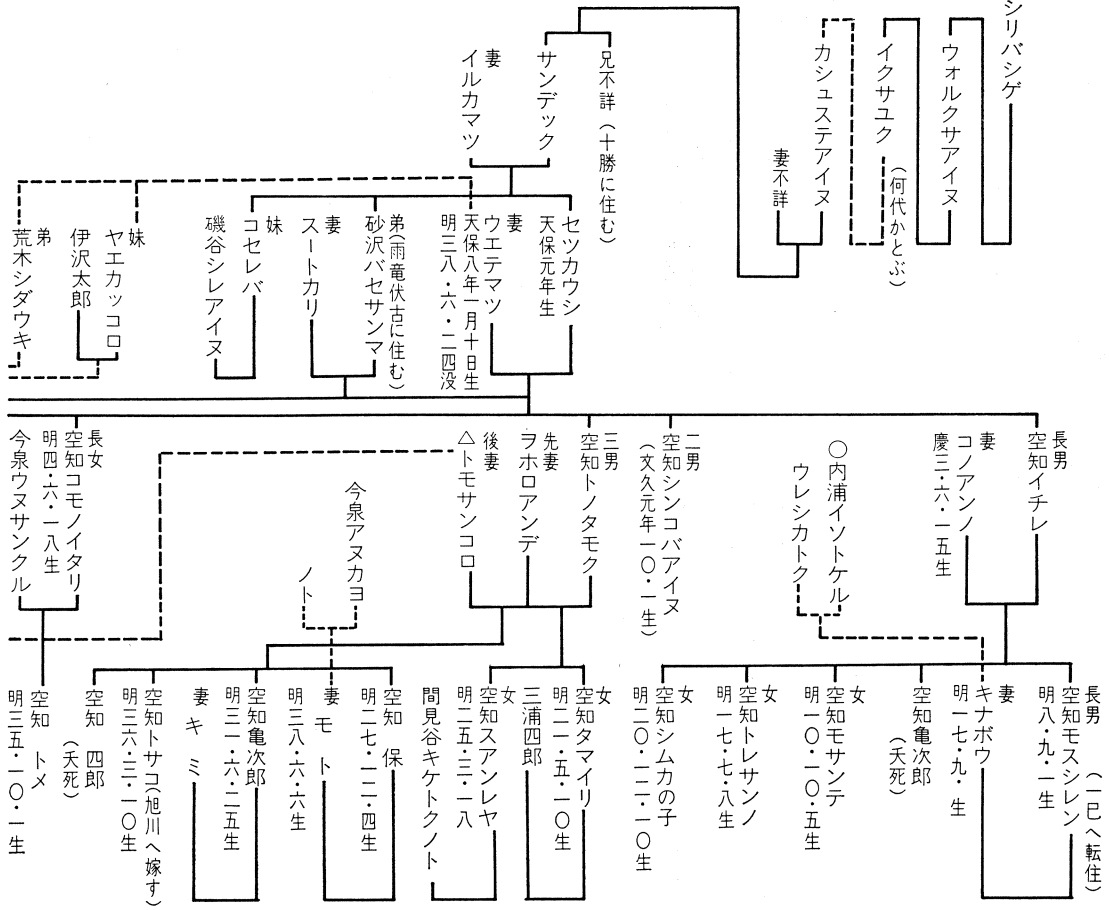
(以下略)

ワツカウエンベツのコタンは最近まで続いた。昭和四十一年刊「新十津川町史」には次のように戸口について記されている。

大正八年におけるアイヌの戸口は、一四戸・七六人(男<sup>三六</sup>女<sup>四〇</sup>)を数えているが、現在では、ほとんど転出し純粹のアイヌはわずか三戸・一四人(男<sup>七</sup>女<sup>七</sup>)に過ぎず、農耕と出稼などによって生計をたてているがその生活水準はきわめて低い。なおワツカウエンベツには、ほかに樺太土人三戸・一二人(男<sup>七</sup>女<sup>五</sup>)が住んでいる。

ワツカウエンベツは通称「泥川」といって、新十津川町西徳富吉野町から泥川に沿って約六キロメートル、徳富岳、富士形岳を真近かに仰ぐ山奥で水田をおもに畑作などをして生計をたてていた。セ

トックアイヌ・セツカウシ一族

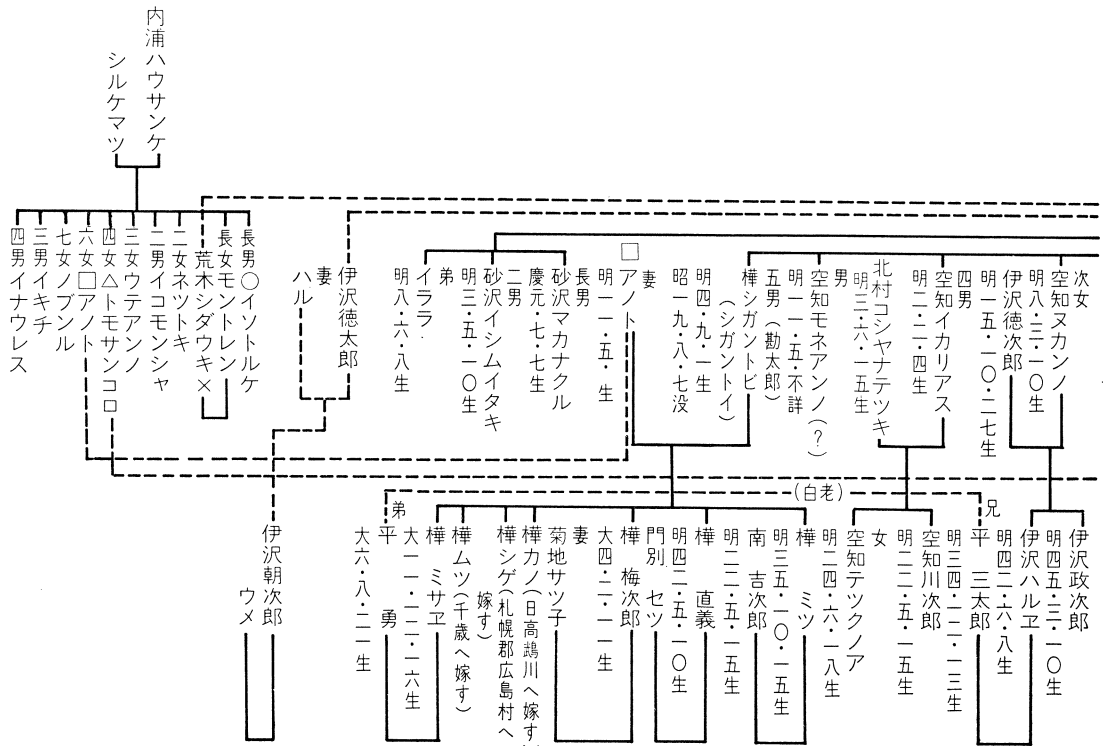


ツカウシの子供達は道庁役人から「空知」の姓を付けてもらったが、末子シガントイだけは「樺」の姓をつけてもらった。これは空知・樺戸の郡名からとったといわれる。

泥川アイヌ地は空知と樺一族が主体となっていた。泥川地区は高い山と山にはさまれた狭い地域で、ここを流れているのが泥川といわれる。この地域に水田を主とする農耕を営んで生計を保っていたのであるが、耕地は多いので二町足らず、少ない者は数反という状況であったといわれる。そのうえ山間地であるためしばしば冷害に悩まされていた。

生計を維持するために冬は山仕事に従事する者がほとんどで、造材（大木の伐採）に出稼ぎが慣しとなっていたが、林業の衰退によってこれまた思うような稼ぎができなくなっていた。

泥川を集団退居した理由は、このような状態の中で減反政策があった後の昭和四十五・六年から転出しているところから、まず第一としては水田耕作の放棄があげられる。次は昭和五十年の水害である。谷間に点在するコタンを泥川の水が溢れて流れ出し、猫の額ほどの耕地を荒してしまったということである。このことが決定的な退居理由となるようであるが、その奥には山間僻地に居を定めなければならなかったこと、さらに求めた土地の



位置と面積に関係があるように考えられる。兎も角、明治四十年ごろから続いた新十津川町泥川のコタンは消えたのである。

昭和四年の空知要覧によると、昭和元年末の空知管内旧土人は戸数二五戸、人口一三八人で、新十津川、雨竜、一巳、深川、音江、滝川の各町村に在住し、主として農業を営んでいた。

### 3 アイヌの生活

衣食住 アイヌの生活、特に衣食住について、簡略的に述べると次のとおりである。

〔衣〕 アイヌは古くは毛皮、魚皮などを身にまとったが、本州との交流が進むにつれ植物繊維の衣服を用いるようになった。

春まだ早い三月ごろの堅雪の中で、「ハブラピ」と呼ぶ木の皮はぎが春の仕事である。この頃の木は大量に樹液を出しはじめ樹皮がはがしやすくなる。アツンを織るオヒョウの皮、それを染色するハンの皮、家の屋根や生活器具を作る樺の皮はぎは大切な仕事で女性が行う。衣服の繊維にはオヒョウの皮が最もよく弾力に富み、よい糸がとれるという。木に祈願して根元に鉋で傷を入れ、根元から梢まで一気に帯状にはぎとる。しかしその木の

第三編 開拓

旧土人戸口数(昭和十七年十二月末日現在)

支庁名	市名	戸数	旧土人の家族数		計	旧土人以外の家ニアル旧土人	
			男	女		男	女
石狩	空知	一〇四	二四八	二五八	二五九	二七五	一三
上川	川	二七	五九	六九	六三	六九	一二
後志	志	三九	九九	一三五	一〇二	一三六	一
檜山	山	四六	一〇九	八〇	一二二	二一〇	一四
渡島	島	二六	六六	七八	九二	一六一	一
胆振	振	七六	一八七	一五六	二三四	四四〇	一九
日高	高	七二	七三〇	一七二七	二八〇	三、六二七	二〇六
十勝	勝	一、四〇八	二、八五七	三、一〇三	二、八九二	一、二二〇	九五
釧路	路	三二九	五四六	五三五	五八四	一、一五三	四二
根室	室	二〇四	四六〇	四七五	五〇七	四九五	二〇
網走	走	一九九	二二九	二〇〇	二五二	四七二	一三
宗谷	谷	一一四	二二三	二四五	二六三	五三七	一四
留萌	萌	二二	五〇	五四	五五	一七	一七
旭川	川	七五	一六一	一七三	一六四	三三九	一
室蘭	蘭	九八	二一〇	二〇二	二一四	四三四	一
釧路	路	七七	一七四	一〇二	一八七	三〇〇	六二
帯広	広	四〇	六九	八九	七六	一六七	一〇
合計		三、五二四	七、五一五	七、七〇三	八、〇〇三	八、一三六	三、四三二
昭和七年末現在		三、五一七	七、四一八	七、六〇七	七、八四八	七、九八一	五四一
同十一		三、六五二	七、六九三	七、八一〇	八、二二七	八、三三七	五八八
同十六		三、五二四	七、五一五	七、七〇二	八、〇〇三	八、一三六	四三二
昭和十七年十二月末日現在		三、五二四	七、五一五	七、七〇三	八、〇〇三	八、一三六	七七七

△北海道年鑑昭和十九年版▽

皮を全部取るようなことはしない。皮は水につけ、ドロドロした繊維だけが残ると干し、薄皮をはぐようにしてばらし、「より」をかけて糸にする。

[食] カマイ・チェブはアイヌが「神魚」とよんだサケのことである。アイヌが好んで食べた主食は、サケとシカの肉でサケは神が授けた魚としカマイ・チェブとよんだものである。地方によってはカレイやニシンなども「神魚」となる。

サケが川にのぼるとコタン総出の漁となり、銚で刺し、タモで捕るが、サケの頭をたく棒はイナウ（木幣）のように削りかけの木をつかい、いくらとれるからといってただの棒や石は使わなかったという。

植物性の食糧は山菜であるが、エゾエンゴサクは「アイヌイモ」とよばれその球塊茎は重要なでんぷん源だった。このイモ掘りも女性の仕事で、シカの角や木で土を掘りイモを採り集めて運んだ。

イモには苦味があるから二、三日水にさらしてから、ゆでたり、魚肉や山菜と煮込み、またモチを作って干して冬の食糧に保存したりする準主食であった。

[住] アイヌの家も古くは穴居だった。穴の上にケツンニという屋根をのせるのが原型である。ケツンニは三脚錐を二組作り、それに棟木をわたした。また、プレハブの様に積み重ねていくのがアイヌの家造りの特徴だといわれる。

屋根、壁の材料はヨシ、ササの葉、木皮で柱はハンドイで作り、部屋は方形一室だけであった。中央に長方形の炉を作り、天井を張

らずに煙出し窓を設けた。

新しい家ができると、屋根の両隅に魔よけのヨモギの矢を射込み木の実や穀物、酒カス、酒をふりまき、新しい家に食物がくるようにと祈ったといわれる。

家を建てる土地の条件として、サケやマスののぼる川の産卵場近くを最高地とした。

またアイヌは冬の家と夏の家を分けた。自然に即応した生活のために二つの家を持たせたものである。

冬は山にこもり、ときには猟もしたが、大部分は自然にさからわずに暮らした。夏は海に川に山に猟を求めやすい平地に下って生活をしたのである。

#### 4 トックアイヌの人物実話

##### ◎ セツカウシ狐をとる

安政五年二月二十九日傍流雑木立を上る。小山ニツ越(二十余町)原野(五、六丁)を下り、キンクシベツの後を下り(二十余町)チクベツト(大川)の大番屋に着す。爰に玉川慶吉越年なしたるに出逢ふ。先長途の案を賀し、糶四升、玄米八升を乞て酒を醸らしめ置、上川土人の分手当品等を持たせ不残家に遣しぬ。

此辺狐多き由にてセツカウシは一升入の油樽の古きが有しを持来り、暫時考居りしが、是に三寸釘三本を三方より打、裏の方に投置しや、其夕方狐一疋を獲来り我等に餐しぬ。其捕方、桶の中の油臭きが故嘗んと



セツカウシ狐を取るの図 <松浦武四郎著十勝日誌より>

首を突込や、釘は首にかかり抜ざる時隠居て打殺すなりと。夜イワンハカル、クウランケ来る。

△松浦武四郎十勝日誌▽

◎節女ウエテマツ (天保八年一月十日生、明治三十八年六月二十四日死亡)

西地石狩川筋なるトックといえる処に住しける「セツカウシ」は二九歳、上カバタの乙名でその妻「ウエテマツ」は二二歳、生来の美人織物にもたくみで勇気ありき、番人某なるもの見染めしより恋せしため、幾度かセツカウシの浜へ連れ下り居ける時、その夫セツカウシを漁場へ遣はしおきてその閨房へ行きしに、少しも承知せずして居りしが、もし我になびかざるときは、かくの如き目に見せんと、種々漁場などへやり責めつかひしに少しも屈せずその後又ぞろ閨房へその男忍び至りしかば陰囊をしめしとかや。その番人名を失念せしが、当年はその陰囊痛みを発して稼ぎに下らざりしとかや

△松浦武四郎蝦夷人物誌▽

◎小使役トミハセ

東西蝦夷地たるや其場所々々酋長 小使 土産等云る役あり其小使役を勤めける者なるが、石狩場所中川筋トックといへる処や運上屋より里程凡四十里にして船舶五日を上る地なるが其地に住するトミハセ三十七歳といへる者妻をヤエノマツといふ。其この間に十歳五歳に二歳になれる三人の女子あり、いと中むつましく暮し毎に孝心の聞えありしものとかや、然るに五六年も以前に父母共に死し其より大に力を落し其墓へ朝となく夕となく唯さめざめと涙をこぼしては何事か云よし、又運上屋元へ下しある時といへども朝な夕な山の方を向ひて何事やらん云よしにつきて衆夷是を不思議に思ひ我は何事を朝な夕な言ふやと尋ねしかば何ぞ別のこととなし。今日は寒かった今日は暖かにありしや何の仕事をなしたり何処へ行たり今帰り来りしと皆一々親へ告知らすなりと答えたりとかや。

然るによつて其を尋ねし夷人等も其切なる心に感じ唯閉口をぞしたるとかや。

其事は余ウリウより西海岸へ「ヌフシャ」といへるを越るに連行しときに他の夷人より話しに聞居たりしが半ば信と半ば聊か疑ひも居たりしに、今年また五月に余石狩に着するやチタラベ(キナといへるもの小さきなり神酒呑する時

に用ゆ)一枚を持来り去年種々手当を遣したる礼を演たりしかば其篤実にも愛で感じ此度も山行には供致し呉れ候様に頼み約し土産に酒一升を遣すべきが是は此処にて遣し候哉、大樽に入れ山に持行き山に入りてより遣し候哉と尋しかば左候はば其酒は山へ行きてよりほしき由申したりけるが其は何故に山にてか宜敷ぞと尋ねしに山にてもらひ候はば墓所へ上るよし答えぬ。左候間其よりは少しも早くもらひ吞が宜しかるべしと嘲しかば黙して答もせて去りたりける。

然るに我等山へ行きトックへ着し約定通りに其一升を遣はせしかば直に之を親の墓所へ持行きややしばらく其酒を手向けまた自らも吞等していと嬉しげに拜畢て帰り来り隣家なるイレンカシと云る老人と叔父のイコレフといへる等へ振舞ひ其酒の訳我よりもらひしといとも町噂に申聞かして勧め居たりしが後に山にて何故にほしがりしやと又尋ねしかば同じ墓所へ手向度ぞ覚ゆるままに山にてと願ひたりと答えぬ(國略)トミハセ明治八年死亡

△松浦武四郎蝦夷人物誌▽

◎空知イチレ

空知川畔土人四五戸ノ居アリ就中「イチレ」ト云フアリ容貌魁偉年齢三十歳ヲ過ク微ク内地ノ語言ニ通シ物理ヲ弁ス故ニ各土蛮之ヲ尊敬スル事自ラ酋長ノ如シ且近来自ラ農事ノ為サムルヘカラサルヲ曉リ頻リニ耕作ヲ為シ既ニ粟、稗等ノ収獲アリ以テ木実魚獸ノ欠ヲ補ヒ食糧ニ供給スト云フ典獄之カ殊勝ナルヲ賞シ農鋤等ヲ給与シ且樽酒ヲ飲マシメ以テ将来ヲ励奨セリ

△明治十七年十月典獄上川郡巡廻日誌・月形町蔵▽

これは樺戸集治監典獄月形潔の上川郡地方巡回日誌に記されてある一節であるが、イチレとはセツカウシの長男で当時石狩川左岸空知川畔に住んでいた時のことである。

◎樺勘太郎の狩獵

樺勘太郎は新十津川村のアイヌの酋長であった。同村の今泉コモノイタリとともに熊狩りの名手でもあった。樺夫妻はときにその子供も連れて、明治時代から大正の終わりがらまで毎年秋の末になるとベンケ、ウタウシナイの沢にやつてきた。

樺の一家は沢の上流部まで遡り、雪穴を設けて冬を住み、主としてタヌキ、クマ、キツネ、テンなどの狼を続けて春までいるのをつねとした。

彼の一家は年々同じ季節になると欠かさずやってきたから、秋も末になって彼らの一家族が狩猟道具や食糧などを背負って下流の鶉開墾地を通り沢奥深く分け登って行くのを眺めた移民たちは「ああ、またアイヌが登ってきた。」と言外に晩秋の寂寥感と真近に迫る厳冬の脅威とを感ずるのをつねとした。

△上砂川町史▽

注 樺勘太郎は、セツカウシの末子シガ

ントイのこと。明治四年九月一日生れ、昭和十九年八月七日死亡、七四歳、なお今泉コモノイタリはセツカウシの長女に当たる。また樺勘太郎の妻アノトは明治十一年五月生れ写真は昭和三十四年十月に写したものである。



(故) 樺 アノト

## 5 アイヌの伝説

アイヌの伝説はたくさんあつて多くを記載する余裕がないが、更科源藏編著アイヌ伝説集からトックアイヌの伝説を二、三掲げる。

◎石狩川の河童 或る人が石狩川を舟でのぼって来て途中で日がくれたので、火を焚いて野宿をしていると、川下の方から大勢の者が舟を漕いで来る声して来た。耳をすましてきくと

フワイー フワイー ヘッチョー ヘッチョー

というききなれない掛声なので、不思議に思つて川の上へ横に伸びている木の上に登つてみると、頭の禿げた子供みたいのが大勢で舟を漕いで来たが、きれいな月夜だったので、木の上にあがっている人の姿が川水にうつつていてところへ来ると、舟の中の者は川に飛び込んで水にうつつていて人間の姿をつかまえないように水にくぐつては、川底の沈み木などを捕んであがつてきては、腹をたて舌うちをしては投げて騒いでいたが、そのうち夜が明けてきたの

でどこかに行つてしまった。

石狩川で河童のことをミントチといつて、石狩川の川口にいて魚を支配する神であるが、魚は沢山とらせるが時々漁場の雇人達を獲るので、石狩の老人達が日高の静内の方へ移るように頼んだので、それからは人死はなくなったが、同時に魚もあまりとれなくなつた。

△新十津川町泥川 空知保老伝▽

注 空知保はセツカウシの三男トノタモクの子で明治二十九年一月四日生、昭和四十七年二月十六日没

河童は他にミントチカムイ、ニントチカムイ、フントチカムイなどともいって全道に、これの棲んでいた伝説がある。ミントチもニントチやフントチも日本の水蛟(みずち)が語源だろうといわれ、河童の形は道南から日高付辺までは、日本のものに似ているが、頭に水の入っている皿がない。日本河童とアイヌのお化けの混血形で奥へ入るほどアイヌ固有のお化けになっている。

△更科源藏著▽

◎雨竜の山男 或る猟師が雨竜川の奥へ山狩に行つたら、三人の人間が向い合つて焚火をしていたが、猟師の姿を見るとこつぜんと消えてしまい、焚火をしていたあとには、三筋の弓と矢が置いてあつたので、それを拾つて持つて帰つたら、それから猟運がとてよかつた。火を焚いた跡には灰が少しあつたが雪が消えておらず、足跡も雪輪の紐のあとがついていてるだけでぬかつたあとがなかった……。

△新十津川泥川 空知保老伝▽

◎<sup>かわと</sup>獺に見込まれた娘 娘が一人いた。するある晩一人の男が忍んできた。そして、それから毎晩のようにこの男が娘のところへくるようになったが、それからは娘の家の中はなんともいえない、いやな臭いがして、とても我慢してもいれないほどになり、娘は一日一日と顔色が悪くなり、しまいに骨と皮ばかりに痩せてしまった。

近所の者が心配して「これはきつと何か悪い者が、娘の魂をとろうとしてきているにちがいない」と、かわるがわる娘の家に行つて番をすることにしたが、ある者は殺され、ある者はまるで魂を抜かれたようにされていた。

この話を聞いた英雄のポノオタシツウシクルは、弓と毒をぬつた矢とを持つ

て、娘の家に行つて寝て待つていた。焚火の燠に白く灰がかぶさる夜中ごろになつて、なにか家に近よつてくる足音がした。ポノオタシツウクルがすかして見ると、なにか獣らしいものが入口にさげてある蕨戸アサギをそつとあげて、その下から家の中のような音がうかがつていたが、やがて蕨戸をそりりとまくつて入つてきたのを見ると、人間のように見えるが、足が四本ある。弓に矢をつがえてブンとはなすと「ギ、ギ、ギ」と変な悲鳴をあげ、蕨戸を蹴つて逃げだした。

朝になつて外にでてみると、血を流しながら川の上よどみに飛び込んだ跡があるので、川筋を調べて行くと、流木のたくさん集まっているところに、獣の死骸がひつかかっているの、引き揚げてみると毒矢にあつた大狸だつた。

ポノオタシツウクルはそれをズタズタに切り刻んで「それ、土の中の虫も、草のかげ虫も、ご馳走してやるぞ」といつて肉片をあたりにばらまいた。

そして弱りきつてゐる娘の着物を脱がして、すっかり身体を洗わずと、すぐに元氣を取戻してもとの身体になつた。家の中の悪臭は狸の小便の臭いで、それを人間が嗅ぐと弱い人間は死んでしまふし、強い者でも氣が変になるものと教えた。

#### △空知郡新十津川町泥川・空知保老伝▽

◎石狩の地名伝説 地名の意味がわからなくなると、その地名について色々の伝説が生れるものだとこのことであるが、これも又その一つの例になるものである。

海で一番力の強いのはラートシカムイ(尾の沢山ある神)という蛸であり、陸での力もちは片翼が七里もあるという巨鳥フリーであつた。この両雄はお互いに自分の力を自慢して反目し合つていたが、或る日のこと石狩川口でたまたま両者が出合い、蛸は墨を吐きながら口を尖らして満月のような目でフリーをにらみつけ、吸盤のついた八本の脚を緊張させて待ち構えれば、フリーも又鋼鉄張りを思わせる翼をはり、鉤状の嘴を突き出して身構えた。やがてフリーの鋭い嘴は大蛸が水の上にふり上げていた脚に一撃を加え、一気に陸に引上げようとした。ズルズルと水面に引出された蛸は、海の底から生えた大綱のように引張られたが、蛸の頭は水面に現われては来なかつた。逆に大蛸が脚をギューと曲げると、さすがのフリーもたまりかねてズルズルと水の中に引込まれそう

になつたので、その尾羽(イシ)を水の中で左右に動かし(カリ)で頑張つたところ大波がたつた。それからここをインカリというようになったという。

#### △旭川市近文 砂沢市太郎老伝▽

注 北海道蝦夷語地名解永田方正著では石狩の原名は「イシカラベツ」回流川の意となつており、鳥尾は「オイシュ」で「イシ」とは云わないとある。なお、砂沢市太郎老はセツカウシの弟砂沢バセサンマの長男砂沢マカナルの子にあたり、雨竜伏古コタンで生まれた。

## 第五節 アイヌ語地名とその語源

北海道にはアイヌ語地名がそのまま使われている所が多く、滝川でも、また周辺を見ても意外に多く、アイヌ語地名を意識した地名なども見られる。

アイヌは衣食住を天然から得ていたので、その生活条件が満たされない場合は居住地を変えたり、夏と冬にそれぞれ住居を移したりした。しかし、この厳しい北海道の冬に備える生活環境を得る場所といへば、おのずから限定されている。

彼らは農耕文化を持っていないため、その食糧とする動物、魚類や野草・木の実などよく採れる場所を選んだ。当然家族数が多くなると穫物の割当てが少なくなるので、コタンといつても大集落にはならず、滝川の地にあつては三、四戸程度の集まりであつた。

生活の糧とする獲物を得るため山野を歩き、川に漁するには広い地域を詳細に調べ、理解しておかなければならないわけで、その位置については川の状態から方位方を表したり、高い山を目じるしとする。このことから地名といつたら川の名から地名となつてい

る。

現在、滝川という地名はもろんであるが、近くの地域を見ても「空知」「雨竜」「樺戸」の語源はアイヌ語から取っている。

空知の原名は「ソーラプチ」(Sorapchi)で「ソー」は滝(瀑)を表し、「ラプチ」は掛る、上から落ちるとい意味で、滝掛る川すなわち「滝川」と訳される。空知川に大滝があることから名づけたもので「ソラチ」と云うのは訛であるが、「空知」といわれるようになった。

雨竜の原名は「ウリロベツ」(Uripo)で鵜の川、鵜の多い川といわれる意味だ、いや「オリリオベツ」の川尻に波たつ川だ、「フウリオベツ」の巨大な鷲の川などの説がある。しかし語源はアイヌ語の発音から地名を取り入れたことには変りがない。

樺戸についても「カバト」(Kapat)からで、河沼に生えている「水草」の名からで、和名では「かわほね」「こうほね」「河骨」といわれる名があり、その実をアイヌが食糧としており、そのカバトの揺れるところともなる。「カバト」が「かぼと」、「樺戸」の字を用いて地名となったものである。

滝川におけるアイヌ地名を解いてみると川沿いに多くの地名がつけられている(明治三十年製版五万分の一滝川の地図)。

#### 石狩川左岸

シモオナイ (Shimo-onai) 石川の意で、川上が「イチャンスプ」で山下に大石が多いので名付けられた。現在の須麻馬内川である。

オオホヒタラ (Oho-pitara) 深い小石川原の意で、小石や砂の厚

い川原をさして名づけられたと思われる。西十七丁目の延長の石狩川左岸地帯に当たる場所である。

ユーベオツ (Upe-ot) 鮫居川 北海道蝦夷語地名解(永田方正著)

には「石狩川の旧流沼となりて流る川の字江部乙ユベオツ又江部乙橋とあるは非なり」とある。しかし、この地名解には「ユベオツ」とある。ユーベを「ユー」と「ベ」に分けて見ると「ユ」は温泉、「ベ」の発音はアイヌ語にないが「ベ」は水や場所を表す所の意味である。さらに「オツ」は「……が群在、群来する」の意であり、「温泉の群在するところ」となるが、アイヌは温泉(冷泉)を利用したとは考えられず、むしろ「ユーベ」は「ちようざめ」と訳し「ちようざめの群来する」川とした方がアイヌ生活に密着したものとなる。鮫については各所に見られるので、永田著の「鮫居川」の意識が正しいと考えられる。

ユーベオツは江部乙町の語源であり、川は現在の江部乙川である。

ホロヒリ (poro-piri) 大渦のことで、西十一丁目の延長線に当

たる石狩川本流に大きな渦ができることから来ている。

チフヤンウシ (Chip-yan ushi) 舟揚場のことで、上川のアイヌが

石狩川口より帰ってきたとき、川が氷りこれ以上遡れないということから此処の地点で舟を陸に上げ囲って置くところから名づけられた。現在の熊穴川にあたる。

ポンチフヤンウシ (pon-chip-yan ushi) 小舟揚場にあたる。チフ

ヤンウシの南側を流れる川で、現在の「ラウネ川」に当たる。

**ラウネナイ** (Raune nai) 深川と訳している。説明に「今は川幅僅に二間許にして水浅し、然れども川の両傍に高岸あり、相距る凡十間許なり、故に名く」とある。川が深いということは両岸が高く、川水が低い所を流れているということからきている。現在の深沢川でラウネ川ではない。

**テパウンナイ** (Tepa un nai) 禪川と名づけたこの川は、だれが何時禪を洗ったか分らないが、こう名づけられた。現在の西二丁目延長線にあった。

**アハタウシユナイ** (Ahatashu nai) アハ草を掘る川のこと、この川の傍に「アハ草」があつて、アイヌ人はこの草の根を食料としていた。「キツネノマメ」ともいわれたこの草の根に豆のようなものがつき、これを採って食べたものである。蝦夷語地名解(永田著)にはこの河川名はあるが、明治三十年地図には位置が示されていない。

しかし安政年間にこの地を調査した松浦武四郎の「東西蝦夷山川地理取調図」によると空知川の川口より少し上流に「アツタウシナイ」という支流があり、明治五年の高畑記録には「トック」のアイヌ小屋四、五戸の地であるし、また、この地図は「トク川」を示している。このことから現在の「銀川」であり、この川口にセッカウシ・空知イチレ」などが住んでいたと考えられる(石狩川実地検測図参照)。

### 空知川及び右岸

**ソーラプチ** (Sorapchi) 滝下る所と訳している。空知の原名の項に記してあるが、「ソ」は滝であり「ラプチ」は「ラプ」と「チ」と分けて「ラプ」は下るの複数形で「チ」は動詞について「群生・継起・継続」などの意がある。すなわち「滝がごちゃごちゃ落ちていく」という意味である。古くは「ソーランケペツ」(滝を下す川)の名でもよばれていたといわれる。

**ソーラプチペツ** (Sorapchi pet) 空知川のことである。「ペツ」は大きな川につけられるもので、小さい川は「ナイ」となる。

**ソーラプチプト** (Sorapchi ptu) 滝下る川の口で「ソーラプチ・プツ・プト」の略に当たる。「プト・プツ」は川口のこと、空知川の川口をこれから「ソーラプチ」で「空知太」の字を当てたものである。

開村までは空知太は滝川を指している地名であつて、現在の砂川市空知太の地域だけのものではない。アイヌ語の「ソーラプチプト」はもちろん空知川の合流点附近全体をいうものであるが、この地の開発に当たって空知川右岸に道路事務所ができ、位置としての空知太の名が確定したのであるが、その後の境界変更や市街地区の発展により、滝川市内から空知太の地名は消えた。「空知」の地名はこの「ソーラプチ」から起つたものである。

**フシユコソラプチ** (Hushko sorapchi) 古空知川、「フシユコペツ」ともいう空知川の旧流である。現在は中島町の北側に小川として残っている。

### シュパオマナイ (Shupama nai)

鮫卵川と訳しているが、鮫の産

卵場のことであり、「シユヅ」が正しい発音であろう。現在、この川はないが明神町・空知町を経て空知川に流れていた小川であり、開拓前は現市街地区に湿地や沼があり、鮫が、この小川をのぼり産卵していたという。空知川のサメ淵とか石狩川のユーペオツからみても相当の鮫がいたと思われる。

**カマツツカ** (Kama ut ka) 平らな岩がある浅瀬のことで、現在の東町空知米穀の前方空知川右岸である。

**ララマニウシユナイ** (Raramani ush nai) 水松川と訳しているが、オンコ(イチイ)のことで、この辺一帯にオンコがあったことから名づけられた。現在の東滝川にある第二小野川のことである。

**セイオピラ** (Sei-o-pira) 貝殻の多くある崖のことで、ララマニウシユナイの川口一帯をいう。この地には幌倉層が露出し、貝化石が今でも産出している。

**モケナシ** (Mo-kenas) 小さな川ばたの木原と訳せるところで、セイオピラの東方一帯をさす低地に小木が生えていたことによるものと思われる。

**ポンクラ** (Don kura) 「仕掛弓を置く低いところの小川」と訳せる。永田方正著では「機弓を置く小川」となっているが、語句の意味で、「ポン」は小さい・少ないに当たり、「クラ」は地名小辞典(知里真志保著)にない。「ク」は弓のことであり、「ラ」については低い所や魚の肝臓、翼などで、「川は生きている」田中吉人著では「仕掛弓を置く低いところ」と訳しているところから、訳としたが、「仕掛弓を低く置くところ」とも考えられる。なおポンクラ川

は滝川・赤平の境界であり、現在も同名の川である。この川の東方に「ポロクラ」川があり「ポロ」とは大きいという意味でポンに對比される語である。「ポロ」を「幌」にあて、赤平区域に上幌倉、中幌倉があり、滝川区域は下幌倉と称していたが、現在は東滝川と改称されており、赤平市にあつては豊里・幌岡・共和と称している。

#### 附近市町の地名

**砂川市** オタウシナイ (Ota-ushi-nay) オタは砂、ウシは多

い、ナイは川で、砂の多い川の意識から砂川と地名がつけられた。なお、開拓当初は「奈江村」と称し、ナエ (nae nay) 谷川の意味を持つナエ川の「奈江」を使っていた。

**赤平市** アカピラ (Aka-pira) アカは(尾根・山稜の、ピラは崖で、山稜の際にある崖のことで、この位置は現在の滝川公園に面する山岳地が空知川に削られ、切り立つ崖となっていた。当時はこの空知川本流が短絡して沼となって赤平沼と称されていた。赤平の呼称は別に「フーレピラ」赤い崖から名付けられたといわれてきた説もあるが、開発の地点からみて方向を示すとき、空知川口に近い赤平区域は「アカピラ」で「フーレピラ」がより川上にある。当時の呼称はアイヌ語を語音のまま和字にあてはめるのが普通で、赤平市では「アカピラ」を語源とする説を強張している。

**歌志内市** ペンケオタウシナイ (Penke-ota-ushi-nay) ペンケは川上、オタは砂、ウシは多い、ナイは川で川上の砂の多い川であるが、オタウシナイを歌志内に音訳したことになる。

**芦別市** アシユベツ (Ashi-ube) 立川の意で川底が低く峻し

